

薬事日報連載 第5回：「やぶれかぶれ・クロマトバカ野郎の逆襲」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2024.6.12

告白する。僕の黒歴史は、結構長い期間に及ぶ。

最初は、戦力外通知を受けた頃だった。所在のなさに震え続けた。そこから一念発起してクロマトグラファーとしてのキャリアをスタートさせて以来、タイガーマスクばりの連勝記録を重ねてきた。自分の“心持ち”と習慣を変えることで、居場所を見つけられた気がする。自他共に認める“クロマトバカ野郎”になった。

問題はその後のハナシだ。会社で承認欲求が満たされないまま、“ドス黒いココロ”を持って余した。実際、僕は随分長いあいだヤサグレていた。研究職として認められず、20年近く研究補助職に留まっていたからだ。

1つ目の理由が、最終学歴にある。前職では大学院を出ずに入社すると、ほぼ例外なく上記の職種、格付けになる決まりだった。僕は宇部高専卒であることを今も誇りに思っているが、この頃は「大学に入れなかった、足りない奴」と笑われていた。

2つ目の理由は、業務内容にある。連載第1回でも述べたが、クロマトグラフィーは今でも「取るに足らない業務」と見なされる風潮がある。たしか、戦略外通知を受けたときも、「ずっと雑用（クロマト）だけやっつけ！」とキツイ言葉を受けたと記憶している。

“研究職”とは何か。僕なりの矜持がある。次の4つを循環させることだと思う。

①世の中に欠けている課題を設定すること。②課題の原因を特定、解析すること。③課題を解決しうる打ち手の仮説を立てること。④打ち手が社会にとって有益であり、他者のそれより優位であると検証すること。

上記のサイクルを独力で実行し、数多くの表彰を受けてきた自分にとって、「これ以上何をすれば“研究職”として認められるのか」と、見えない境界線に憤ったものだ。

当時はヤサグレ度合いを示すためだったのか、金髪に染めていた。大人の反抗期である。“やぶれかぶれ”と言うべきか。図らずも近所の子供達からは“スーパーサイヤ人”と呼ばれ、ちょっと崇められることになる。

前置きが長くなったが第5回は、心・技・体揃ってヤサグレていた頃の僕が、懲りずに仕掛け続けたことについて述べる。後に言う“やぶれかぶれ・クロマトバカ野郎の逆襲”である。ちなみに、まだ“説”になっていないので読者間で流行らせていただきたい。

映画監督・北野武さんに憧れた。あくまでも自分の解釈だが、“世界のキタノ”になった途端に日本国内で作品の評価が高まったと認識している。ここに勝手に共感した。

閉塞したムラ社会では、異業種に対する偏見が強い。ヴェネツィア国際映画祭で最高位

を受賞する前から、価値あるキタノ作品があったことに疑いの余地はない。“芸人”という肩書きがムラビトの目を曇らせたのだろう。初めて「あの夏、いちばん静かな海」を観たとき、僕は落涙してしまった。金獅子賞を取る前の映画である。

「そうだ、逆輸入で行こう。」JR 東海のキャッチコピーみたいなことを思いついた。

きっと他の会社でも僕と同じような境遇にあり、ヤサグレ者がいるかもしれない。ヤサグレていないにしても、状況を変えたいと思っているかもしれない。業界のトラたちを探そう。そこで他流試合を挑んでみたい。“クロマトバカ”のともだちを作りたい。あの手この手を尽くし、賛同してくれるメンバーが集まった。むろん合法である。

これが、僕が代表を務める“クロマトユーザー会”という非営利の研究会のはじまりだ。国内の主だった製薬企業に加えて農薬、化学、食品、飲料の分野まで広がった。ここでは売り手と買い手の垣根を越えて、“イノベーション”について議論を尽くす。その趣旨に大学教授センセイの方々も賛同して下さり、有意義な“クロマトバカ野郎”の集まりが出来上がった。

この会の目的は、「クロマトグラファーの価値をどうやって高められるか」を議論することにある。現在では100名程度の規模に成長した。発足から約15年が経過した。そのあいだ、この会を通じて知り合った友人達と切磋琢磨してきた。そして現在に至る。



図1：クロマトユーザー会の風景 主宰者・三輪の挨拶の場面

“逆輸入”の発想は成功した。この会と、主宰者である僕のクチコミ評価は、前職の上層部の耳にも届くようになった。「タケダの“クロマトバカ野郎”は、凄いらしい。」なんだか

劇団四季の“オペラ座の怪人”のキャッチコピーのようで恐縮である。実は、はじめから本家のような評判の獲得と、演劇のストーリーラインの踏襲を狙っていた。

所在がなく、やむをえず地下室に閉じこもっていた異形の者のハナシ。オモテには立てないけれど、突出した才能で舞台に絶大な影響を与えるチカラを持つという設定。50を過ぎても中二病をこじらている僕が、この物語を好まないはずがない。再現を試みた。

だが一応断っておく。穏健派で愛猫家の僕は、意中のヒトを拉致するような無粋なことはしない。小奇麗にフラれてみせる、潔いジェントルであることを特筆しておきたい。

ヤサグれていた頃、「絶対、周りの評価を変えてやるウ」と息巻いていた。結局のところ、変わったのは僕自身のマインドセットと自己表現の方法だった。どのように変わっていったのか、ここにお伝えしておこう。

1つ目は、マインドセットの変化だ。“心持ち”が、豊かさを決める。金髪の頃は、「俺ナイス！なんなら俺だけナイス！」だと思っていた。それが“クロマトユーザー会”を発展させる過程で、「クロマトグラファターの俺たち、ナイス！」と言えるように取り組んだ。そして経験を重ねた今では、「作り手・使い手の垣根を越えて、みんながナイス！」になれる世界を目指すようになった。




| | ヤサグレ前 | ヤサグレ真っ只中 | ヤサグレ後 |
|-------|--|---|--|
| |  チャラリマン研究員 |  指名手配犯？ |  ジェントル社長 |
| 体重 | 50kg | 60kg | 体重：60kg 心持ち：プラス10kg |
| 抛りどころ | UFO信じる | 自分だけ信じる | 仲間を信じる |
| 症状 | 中二病 (ブロンズ級) | まだ中二病 (ゴールド級) | 永遠の中二病 (プラチナ級) |
| 願望 | アイドルと 交際したい | アイドルユニットを プロデュースしたい | 愛猫と 長く一緒にいたい |

図2：ChromaJean 代表・三輪の心持ちの変遷

2つ目は、自己表現の方法だ。人生は、舞台。“スーパーサイヤ人”の頃は、「荒川土手で、宝石を売る」ようなマネをしていた。ニーズがないところで、必死に自分個人の能力

を売り込んでいたと猛省している。分離技術の高さを示すために、「夫婦以外なら、何でも分けてみせる」などと怪気炎を上げていた。もしかすると、研究者よりも噺家の才能の方があったかもしれない。

“宝石”を売っている自負がないなら、そんな研究や事業なんてやめてしまえば良い。肝心なことは、相手に“宝石がそこにある”と認識してもらえるストーリーづくりと、それを表現する舞台の設定だ。これについては次号の最終回で述べるつもりだ。

ヤサグレ者は、“研究補助職”から“研究職”へ認められた。当時の前職の人事制度において、大学院卒以下の学歴では僅か1パーセント程度の確率であるらしかった。それから間もなく、創薬研究本部にて幹部社員である主席研究員を拝命した。こちらの方は、0.1パーセント以下であると聞いた。以来、“スーパーサイヤ人”になることは見合わせている。

周囲から、“快挙”と言われた昇格・昇進は勿論嬉しかった。だが、気持ちは既に起業へ向かっていた。自分の発想と技術で、もっと広く社会の役に立てそうだと思った。

長きにわたる僕の黒歴史は、ざっとこんなところだ。起業に到るまでの発想や取り組みは、少し変わったところがあったかもしれない。

しかし、自身の“強み”を探して手に入れるまで、その価値を他者に認識してもらおうという自己実現は、いかなる業務のリーダーあるいは起業家にも当てはまる道りではないだろうか。ジェントルは、“わかる⇒できる⇒伝えられる”を愚直に繰り返すほかない。

自分が思うよりも、周囲は公平・公正に自分を観察してくれている。

何故かは知らないが、たいていのネコは初対面から僕の膝に無断で乗り上げる。

彼らは素知らぬカオをして、思慮深くジェントルの資質を見極めていくのだ。



図3：ひなまつりケーキに熱い視線を送るおこげ社長